令和 2 年 3 月期決算分析資料を公開いたしました

改めて
上場企業社長・経理担当役員・担当各位様、上場廃止企業元役員様、
マスコミ各社様、会計学者各位様、公認会計士各位様

2 年前に 3 月期の上場企業約 1800 社の 10 年分の分析データ(日本及び世界初の内容)を公開 いたし、10 年分をもって一区切りにしようと思っておりましたところ、予想外の数のご関心と、 しばらく継続すべきではとのご意見をいただきましたので、昨年の平成31年 3 月期に引き続き、今年度におきましても直近の令和 2 年 3 月期の決算資料を公開いたしました。

これまでの課題として、①利益予想などできて当たり前という(日本及び世界の)認識は、本当にそうなのかどうか②売上を上げれば利益が増え売上が減れば利益は減るというのは本当かど うか③増収・増益、減収・減益があるべき姿だとすれば、減収・増益、増収・減益はありえない ことになるが本当かどうか、等々についてその検証と問題点をあきらかにするものです。 決算分析にあたり、上場企業は公開会社でありますので、前年に引き続き、具体的社名を上げ、 具体的数字に基づいて「改めて問題提起」をさせていただきたいと思います。

A 利益予想は本当に可能かどうかについて(黒字予想で赤字転落の事例) 上場企業の公的数字として黒字予想発表をしたが、その結果が赤字となり、赤字転落発表と なった企業を改めて整理検証するものです。

これまで過去 10 年間の分析手法と同様、「予想数字は、一年前でもなく、半年前でもなく、3 ケ月前の予想でなく、期末のたった 1 ケ月前の数字」であり、それと実際数字と比較し、その実態を明らかにするものです。

通信業界の花形企業ソフトバンクは、1 兆円の黒字を発表したが、現実は経常利益 354 億円 の黒字ながら,純利益は 9615 億円の赤字に転落し、1 ケ月前の予想に比べ 1 兆 9615 億円の赤 字増になっています。自動車大手日産自動車は、650 億円の黒字を発表したが、経常利益は 440 億円の黒字ながら、純利益は 6712 億円の赤字に転落、1 ケ月前の予想に比べ 7362 億円の赤 字増となっています。鉄鋼業界の大手 JFE 社は 130 億円の黒字を発表したが、結果は 1977 億 円の赤字に転落、予想より 2107 億円の赤字増になっています。大手商社の一角丸紅は、2000 億円の黒字を発表したが、現実は 1974 億円の赤字に転落、予想に比べ 3974 億円の赤字増に なっています。石油大手出光興産は 1000 億円の黒字を発表したが、229 億円の赤字となり、 予想より 1229 億円の赤字増になっています。デパート大手三越伊勢丹は 70 億円の黒字を発 表したが 111 億円の赤字に転落、予想に比べ 181 億円赤字が増加しています。その他日本を 代表する 120 社前後の有名企業が赤字転落していますが、これらの赤字転落の具体的事例を ご覧になり、それでも「利益予測は可能である」といえるでしょうか。如何でしょうか?

B 売上げが増えても利益が減る事例について(増収・減益事例)

次に、売上と利益との関係について、売上が増えれば利益が増え、売上か減れば利益が減る という認識についてですが、予想よりも売上が増加しているにもかかわらず、利益が予想より激減乃至かなり減少している会社が 160 社前後あり、変化の激しい事例は以下の通りです。

自動車業界の覇者トヨタは、売上が予想より 4299 億円も増えているのに、経常利益は予想 より 3553 億円も減り、純利益は予想よりも 2738 億円も減少しています。
電力トップの東電 は、売上が予想より 914 億円増えており、経常利益も 640 億円増えているのに、純利益は予 想より 2392 億円も減少しています。電気機器のトップ日立は、売上が予想より 672 億円増え ているのに、経常利益が 207 億円減少、純利益も予想より124 億円減少しています。建設大 手大和ハウスは、売上が予想より 302 億円増えているのに、純利益は予想より 193 億円も減 少、NTT データは売上が予想より 268 億円増えているのに純利益は予想より 168 億円減少、 JFE は売上が予想より 97 億円増えているのに、純利益は予想より 2107 億円も減少、商船三 井は売上が予想より 154 億円増えているのに、純利益は予想より 73 億円減少しています。売 上が予想より大幅に上回っているからには、利益も予想より上回っていると思いきや全く逆 に、利益が予想より大幅に下回っているのです。これが上場会社の利益予想と実際の一端です が、これほどの乖離があっても、利益予想は可能であると言えるのでしょうか?

C 売上が減っても利益が増える事例について(減収・増益事例)
それでは逆に、売上が予想より大幅に減少しているのに、利益が予想より大幅に増加すると いうことはあるのでしょうか。一般的にはこのようなことはないと思われていますが、以下に これらの事例を列挙します。
大手商社の三菱商事は、売上が予想より 1兆 2203 億円も減少しているのに、純利益は
予想より153 億円増加しています。電気機器の東芝は売上が予想より 402 億円減少しているのに、純利益は予想より 373 億円増加、印刷大手の凸版印刷は売上が予想340億円減少しているのに純利益は、予想より 270 億円増加、東京ガスは売上が予想より 488億円減少している のに、純利益は予想より 257 億円増加、電気機器の名門パナソニックは、売上が予想より 2094 億円も減っているのに、純利益は予想より 257 億円増加、同じく三菱電機は売上が予想より 375 億円減少しているのに、純利益は予想より 118 億円増加しているのです。不動産の三菱地所 は、売上が予想より 579 億円減少しているのに、純利益は 114 億円増加しているのです。こ のほか別紙のとおり多数の事例があるが、売上が減っても利益が増えるということが、一般の 方々にご理解できますでしょうか。たとえ結果がでてから，売上が減れば利益も減ると認識している方々にとって、売上がこれだけ減っていても、これほどの利益がでるとは、やっている 当事者本人にさえ理解不能なのではないでしょうか。であるとすれば、まして会計経理に縁の ない理系・文系トップにいくら説明しても到底理解不能と思いますが、如何でしようか。

D 赤字予想の黒字化事例について
黒字予想の赤字転落の事例がありますが、逆に赤字予想が黒字化している事例は数少ないが以下の通り存在するのです。
医薬品トップの武田薬品は 1620 億円の赤字発表をしたが、現実は 442 億円の黒字と　なり、予 想に比べ 2062 億円の利益が増加しています。自動車関連の曙ブレーキは、180 億円の赤字発 表をしたが、結果は 248 億円に黒字化、予想に比べ 428 億円の利益増となっています。 一般の方々にすると、一年前の予測ならいざ知らず、日本を代表する一流企業のたった一か 月

前の大赤字予測が黒字になるなど一体全体どういうことなのか、なぜこうなるのか理解できないと思われます。

E その他の分析事例について
その他の事例として「黒字予想の黒字拡大」「赤字予想の赤字拡大」「予想通りの売上・利益計上企業の有無」等々ありますが、いずれのケースにしても、期末の 1 ケ月前の予測と実際との比較ですが、乖離があることには変わりなく、予測どうりというものはないのです。 参考まで、直近の 2/3 月決算期の上場企業約 1800 社中、利益とは関連づけず「売上高」の 予想のみであれば、予測どうりの企業は約 80 社ほどありますが、利益も予測どうりというの は、1 社もないのです。
以上が 2/3 月期の予想と実際その乖離状況の概要ですが、売上が増えれば利益が増え、 売上が減れば利益も減る、利益予測など誰にでもできる等々の既成概念が、前期との比較であれ、 予想数字との比較であれ、必ずしも正しい認識ではないことをご理解いただきたく、これまでの既成概念を脇に置いて、改めてご覧いただきたく思います。

F これまでの分析から、会計・経理関係者の間で、何が問題で何が違うのか、改めて整理すれば、 以下の通りとなります。

(1) 世の決算業務に携わる上場企業の社長・決算担当役員・担当各位、マスコミ決算担当記者各位、会計学者各位のほとんど全員乃至大多数は、「売上が増えれば利益が増え」「売上げ減れば利益も減る」「利益予想という作業は難しいものではなく、誰にでもできるもの」と思っているか何となくそう信じているように私には思われます。
一方、会計のプロである公認会計士各位も「売上が増えれば利益が増え、売上が減れば利益も減る」という、これまで長い歴史をもつ既成概念を信じているように思われます。また、利益予測に関しては、日本公認会計士協会の元会長は、「利益予測は現在の会計制度の下では、いかなる手法をもってしても困難乃至不可能である」と断じてきた事 実・経緯から、利益予想は、誰にでもできるどころか、プロにも困難乃至不可能と思って いるように思われます。 通常、団体・組織の会長が発言すれば、その発言内容はその団体・構成員の総意である とされ、受け取る側も、そのように受け取るのが自然の受け取り方かと思います。当会計士協会の場合においても、会長が発言したからには、それが公認会計士全員の総意と受け取るのが自然であり、会長の発言に個々の会計士からの異論もでていないようですので、公認会計士全員も「利益予測は現行会計制度の下では困難乃至不可能である」と思っている。と私は受け取っています。

(2) しかし、私は上記(1)及び(2)に関し、そうでしょうか、いずれも正しい認識ではないと思 いますよ、と、かねてより主張しているのです。 「売上が増えれば利益は増える」に関しては、「売上が増えても利益が減る」「増収・減益」 ということが現実に数多くあるので、正しい認識ではないと思いますよ。と。「売上が減 れば利益も減る」に関しても「売上が減っても、利益が増える」「減収・増益」ということ が数多くあるので、正しい認識ではないと思いますよ。と。 公認会計士の日本の責任者・会長が、「利益予測は現行制度の下では困難乃至不可能と断言している」件ですが「公認会計士が利益予測はできないと思っていて、それを主張する のは自由ですが、公認会計士の存在理由を問われますよ」と、詳細は、ホームページで公 開していますので、中間決算制度の致命的欠陥を是正するきっか

けとなった小生の小論と、 上場会社の過去 10 数年の決算の実態と検証結果をご覧くださいと主張し続け、今日に至 っているのです。

(3) 1 年前の予測ならともかく、つい 1 ケ月前に、わが社は黒字になりますと胸はって発表 したのに赤字に転落して、会社の信用を貶め、社内、株主・マスコミ等から批判を浴びて 恥をかいたり、予測した数字が大幅に下回り半分以下になったり、赤字予測の赤字幅が大 幅に上回り赤字倍増になったり、真実を伝えるべく、残念ながら今期は大赤字ですと発表 しながら、結果が黒字になって、会社の信用を貶め恥かいたり、様々なご苦労を重ねてこられた方が、会計・経理関係の皆様のなかには、大勢いらっしゃると思います。

(4) 公認会計士の皆様も、会長が利益予想は現行会計制度の下ではできないと断言している ことを含め、今日の日本の世界の会計レベルが中学生並みのレベルとすれば、これをせめて高校生並みの水準に引き上げるべく、できないことを正当化し続けるのではなく、反省すべきは反省し、できるようレベルアップし、改革に立ち上がるべきではありませんか。私にとっても厳しい半世紀でしたが、物事の進歩・改革は、批判と屈辱感から始まると されています。それだけに、恥をかいたり、批判を浴びたり得難い貴重な経験をされてき た方こそが、これからの日本・世界の会計改革に必要なリーダーであり先導者になるべき であると,私には思えるのです。

エリートながらこれまで理不尽な批判を浴びせられ続け一言申し述べたい皆様、繰り返 しになりますが、会計制度改革のため、日本の会計水準のレベルアップのため、不正会計 をこの世からなくすため、共に立ち上がるご意向はございませんか。

どうぞご感想ご意見をお寄せください。

令和 2 年 7 月 5 日

伊戸川 匡